

転成名詞の文中での意味のあり方 「たのし・さ」と「たのし・み」

中 野 はるみ

要 旨

日本語の転成名詞のなかには、動詞から転成した「うごき」「ながれ」などのほかに、「ひと」や「もの」の性質や状態をさししめす形容詞から転成した「たのしさ」「たのしみ」、「かなしさ」「かなしみ」などがある。これらの形容詞は、「たのしい」や「かなしい」というイ形容詞の語尾「い」を、「さ」や「み」にかえることによって、それぞれの性質や状態をあらわす二つの名詞に転成する¹⁾。このように二つの名詞が登場すると動詞派生の転成名詞に比べ、その意味機能の異同を明らかにしなければ、それぞれの使用に支障をきたすことになる。特に第2言語として日本語を学習するばあい、母語話者の習慣として定着する言語使用とは異なった語彙的な意味理解や使用方法の理解が必要とされるのである。

本稿はこのような形容詞派生の転成名詞を一例に、連語論の観点から「転成名詞の文中での意味のあり方」をさぐる試みである。

キーワード

転成名詞、連語、モノ化、個別化

はじめに

これまでの日本語の文法論研究における「名詞」への関心はけっして高かったとはいえない。これは、従来の日本語文法研究が、名詞の格形態を名詞と一品詞としての助詞の結合としてきたことから、名詞自体の研究よりも助詞研究の方に力が入れられてきたことと無関係ではないだろう。その点は、動詞や形容詞自体の研究よりもその活用部分である助動詞の研究の方が進んできたことと似ている。

しかしながら昨今の動詞研究では、いわゆる助動詞をその内に含んだ研究の進展により、動詞自体の分類研究が進んできた²⁾。日本語を普遍的言語研究の対象として捉えようとしてきているのである。「名詞」研究もその意味で精緻化されることがのぞまれる。

名詞には、実体をもつ「モノ名詞:具体名詞」

だけではなく、動詞や形容詞から転成する転成名詞(「うごき」「たのしさ」「たのしみ」)をはじめ実体をもたない他の抽象名詞も数おおく含まれる。

本稿では、日本語における形容詞派生の転成名詞をとりあげ、その文中での意味を抽象名詞という品詞のもつ機能を考慮にいれて考察する。換言すれば、連語論の観点から転成名詞を捉えてみようとする試みである。転成名詞を考察するばあい、その転成元(動詞・形容詞)の連語論的意味機能と派生した名詞との関係を考慮にいれた観察をする必要がある。

それは、文としての単位のなかで単語(名詞・動詞・形容詞・副詞)が合理的かつ機能的、線条的に構成されてはじめて、意味をもつ思考や伝達のツールとしての機能をはたすからである。

・ 従来の解説

1. 転成名詞の説明

『外国人のための日本語例文・問題シリーズ5』(形容詞)には、付録②として「形容詞」の派生形式が載っていて、名詞への派生ではつぎのような意味説明と例が列挙されている。

イ・ナ形容詞+ さ 名詞

質・量などの程度を表す名詞である。

甘い 甘さ 痛い 痛さ うまい うまさ

おいしい おいしさ 重い 重さ

軽い 軽さ 可愛い 可愛さ 危険な 危険

さ きたない きたなさ 怖い 怖さ

重大な 重大さ すがすがしい すがすがし

さ 親しい 親しさ 太い 太さ

細い 細さ まずい まずさ 柔らかい 柔

らかさ 若い 若さ

イ形容詞+ み 名詞

前の「さ」にくらべて派生の自由が少ない。

暖かい 暖かみ 有難い 有難み 甘い 甘

み 痛い 痛み 悲しい 悲しみ

苦しい 苦しみ 親しい 親しみ 苦い 苦

み 丸い 丸み³⁾ (波線は筆者)

このように「イ・ナ形容詞+ さ 名詞」と「イ形容詞+ み 名詞」の意味説明(波線部分)は、同レベルの説明になってはいない。「イ・ナ形容詞+ さ 名詞」は、一応の意味説明をしているが、「イ形容詞+ み 名詞」はその使用が少ないという「イ・ナ形容詞+ さ 名詞」との比較説明をしているにすぎないのである。確かに派生形式を列挙しているのだが、実際に役立てることはできにくいだろう。

筆者はこれまで、このような転成名詞の意味を、「さ名詞」(以下、「イ・ナ形容詞+ さ 名詞」をいう)は「質・量の程度に重点をおいた名詞」であり、「み名詞」(以下、「イ形容詞+ み 名詞」をいう)は「その性質・状態そのもの」であると解説してきた。おおよその日本語教授者はそのように説明をし、その場凌ぎの説明をしてきていると思われる。ちなみに現代国語の一般的な辞書ではそれぞれ以下のよう

な解説がなされている。

さ(接尾)形容詞や形容動詞の語幹につけて、「そのようなようすである」という意味の名詞をつくる。

【語例】良さ。うつくしさ。スマートさ。厳肅さ⁴⁾。

み(接尾) 形容詞や形容動詞につけて、そういう状態、また、そういう状態がある程度感じられる、という意味を表す。【文例】親のありがたみがわかる。ほおに赤みがさす。形容詞につけて、そのような場所や部分、という意味を表す。【句例】深みにはまる。高みの見物。弱みにつけこむ⁵⁾。

ここでは、「そのようなようすである」と「そういう状態がある程度感じられる」という説明差なのである。

接尾辞を歴史的にみると、「奈良時代の国語」に「さ」や「み」にかんしての記述があり、橋本四郎は以下のような解説をしている。

(形容詞については：筆者)語幹が「ミ」「サ」「ラ」という一音節接尾語を伴って広く用いられることも一つの特色をなしている。(中略)接尾語「ミ」を伴う語幹は、「山ヲ高ミ」「草深ミ」のように助詞「ヲ」を顕在的あるいは潜在的に伴う文節を受けて理由を表す用法をもち、「ミ語法」と呼ばれることがある。この形は名詞化したりサ変動詞を伴ったりする点で動詞連用形に近いが、係助詞「カ」「コソ」・格助詞「ト」指定の助動詞「ニ」を伴いうる特色を示し、打ち消しの助動詞連用形の「ニ」や動詞「欲ル」の連用形がこれと同じ現われ方をする。接尾語「サ」は歌の末尾に位置して喚体句を構成するのに用いられ、後世のように名詞を作る例は少ない⁶⁾。

2. 日本語教育での説明

日本語教育において、形容詞から転成した抽象名詞の意味がどのように教えられているかを、文化庁の『外国人のための基本語用例辞典』からみてみよう。一例として「たのしい」という形容詞を抽出してみる。その場合、大見出し

として「たのし・い」(形容詞)と「たのし・む」(動詞)がある。うち、「たのし・い」の中の小見出しとして「たのしみ」(名詞)を分類してあるのでそのままを掲載してみる。

たのし・い [たのしい] (形容詞)

{
くーない くーなる(する) い(ーと
き) けれーば くーて かっーた いー
だろう(かろーう) (名詞) ~さ・~み
くるしい [苦しい]

心が明るくて、ゆかいな気持ちであるようす。

旅行は楽しいものですね。

仕事が楽しければ、けっこうですね。

ひさしぶりに友だちに会って、ほんとうに楽しかった。

きょうはクリスマスですから、歌を歌って楽しくすごしましょう。

子どもたちは楽しそうに、やきゅうをしています。

いっしょに山へ行ったことは、楽しい思い出です。

けしきのいい海で、毎日楽しくくらしています。

楽しいお正月。楽しい日よう。

(関連語) 楽しむ。

たのしみ [楽しみ] (名詞)

くるしみ [苦しみ]

楽しいこと。楽しむこと。

夏休みがおわってしまったので、もう楽しみがありません。

いい音楽を聞くのが、わたくしの楽しみです。

つりを楽しみとする。

旅行のおみやげを楽しみにまっています。

子どもがrippになるのを楽しみに生きてきました。

あとはこの次のお楽しみに。

たのし・む [楽しむ] (動詞)

{
まーない みーまず む(ーとき) め
ーば め もーう んーで(だ) むーだ
ろう(可能) たのしめる

1 楽しく思う。あることによって自分の心をなぐさめる。 くるしむ [苦しむ]

父は休みの日にはゴルフをして楽しんでいる。

話し相手がないのでひとりで絵をかいて、楽しんでいる。

テレビがあれば、うちで楽しめます。

〇いい音楽は人の心を楽しませる。

海岸(かいがん)へ行って夏休みを楽しもうと思っている。

2 これから先のことに期待(きたい)をかける。

事業の成功(せいこう)を楽しみにして、毎日がんばっている。

親は子どもの成長(=大きくなること。)を楽しみにしてはたらく

たのしみ たのしい (584ページ)

(上記中、細線以外の二重線と太線は筆者が挿入した。)

このように、大見出し「たのし・い」にはまず、活用が載せられていて、その後に「(名詞) ~さ・~み」というように転成の形が記されているが、小見出しには「たのしみ」のみがあげられ、「たのしさ」はあげられていない。なぜふれられていないのかという理由はあきらかではない。

筆者が二重線を付した「たのしみ」の用例と「たのしむ」の用例をみてほしい。み名詞「たのしみ」のうち、筆者が二重線を付したのは、「が格」とコピュラ「だ」に連なっていない後ろ4用例である。み名詞の前後のみを引例して一般化するとつぎのようになる。これをAとしておく。

~を楽しむとする

~楽しみにまっている

~楽しみに生きている

~のお楽しみに

また、動詞「たのしむ」のうちで二重線を付した部分を一般化するとつぎの例になる。これをBとしておく。

~を楽しむにして、~

~を楽しむにはたらく

うえのAとBの違いはどこに存在するのだろう。どちらも「~にする」のタイプである。

参考までに、他の感情形容詞からの転成名詞

を検証してみると、「たのしい」の対義語である「くるしい」⁸⁾は、「くるし・い」「くるし・む」「くるし・み」が見出しになっており、「くるし・い」には、「(名詞)～さ」が付加されているのみである。「くるし・み」は「くるしみくるしむ」と表示され、「くるし・む」の中の小見出しになって、つぎのように4つの例があげられている。

くるしみ [苦しみ] (名詞)

/ 「苦しむ」の名詞の形/

わたしは、彼の苦しみを少しでもやわらげようと思って医者に注射を頼んだ。

話がまとまらなくて苦しんでいる田中さんの苦しみは、わたしも味わったことがあるので、よくわかる。

びんぼうの苦しみは、金持ちの君にはわからない。

○生みの苦しみ。死の苦しみ。人生の苦しみ。

生活の苦しみ。

(関連語) 苦勞⁹⁾

さらに、「かなし・い」という感情形容詞は、「たのし・い」と同様の掲載になっていて、「かなしみ」(悲しみ)は、「かなし・い」の中の小見出しになっている¹⁰⁾。「さびし・い」(寂しい)では、活用の形のあとに「(名詞)～さ」というように記され、加えて、「(関連語) さびしがる。さびしげ。」と記されている¹¹⁾。いずれにおいても「さ名詞」が見出しになっていることはなかったのである。

・ 単語の文中での意味

1. モノ名詞の例

単語の文中での意味は一通りではなく複雑なものである。一般的にもっとも単純な意味をもつ「名づけ」であるとされるモノ名詞であっても、名づけられる世の中の森羅万象に存在する実体そのものが一様ではないことや、名づけの枠の違いにより、文中では他の「名づけ」とのさまざまな組み合わせによって表現される。そ

のばあい、一般的な一単語の文中での意味は他の単語と組み合わせるという文法的な手づきをともなった意味となる。すなわち、文法的な機能によってあらわれてきた意味をプラスすることによって事象を的確にあらわすのである。つぎの用例をみられたい。

彼女はスラックスを穿き、顔には化粧っ気もなく、トックリ襟のセーターを着て、しかも腕まくりをしていた。(太)

クララ寮の入口で太郎が呼び出すと、シスター・矢野はすぐに編みかけのセーターを持って現われた。彼女は朝の雑用をかたづけたと、やっと編物の時間を見つけた所らしかった。(太)

女中が銀盆をさげてでていくあとを追って彼女は応接室をでると、やがて毛糸の編針と玉をもってもどってきた。膝のうえにひろげたのを見ると、それは九分どおりできあがった太郎のセーターであった。彼女はそれをひろげて陽にかざし、苦笑した。(バ)

毛糸のセーターの着心地がよくなった中秋のころ、ある晩、石中先生は、町の好事家たちが催した郷土史研究の例会に招かれた。(石)

上の用例で使用されている「セーター」というモノ名詞は、衣服の名づけの一つとしてごく一般的な名称であろう。この「セーター」という名づけが上の4つの文中では、他の単語との組み合わせにより文法的なむすびつきの意味をともなって表現されているのである。うへの4つの文を下線、二重下線、点線、太線を付した単語同士のくみあわせ(連語¹²⁾)によって以下に解釈を試みる。そのばあい、一単語は、線条的結合をしているため、カザリとカザラレ¹³⁾双方のはたらきをすることになる。

「トックリ襟のセーターを」は、セーターの形態の一部である襟の特徴を表現するノ格のカザリ¹⁴⁾「トックリ襟の」をくみあわせた表現である。「着て」(カザラレ)という「人の終了動作」の動作「着る」の対象語「セーターを」(カザリ)として表現されているので、完成品

としての衣服である。

「編みかけのセーターを」は、「編みかけ」という「編みかける」という動詞からの転成名詞である抽象名詞をノ格のカザリにしたくみあわせである。このくみあわせは、セーターの特徴をその状態で表現している。「編みかけのセーター」は、衣服としての完成品ではなく、「セーター」になる前の「(毛)糸で編んであるもので編み上げればセーターとなるもの」を表現している。「着て」ではなく、「持って(カザラレ)とのくみあわせとなっている。

「九分どおりできあがった太郎のセーター」は、「九分どおりできあがった」と「太郎の」というふたつのカザリをもちいて「セーター」の特徴を表現している。このくみあわせでは、「そのセーターがまだ九分の完成である」という情報と「太郎が所有者であるか、生産者であるか、着衣者であるか」であるという情報がくみこまれている。前文から、「彼女」が「生産者」であるところから、「太郎」は、「所有者」もしくは「着衣者」ということが想像できる。

「毛糸のセーターの着心地が」は、「毛糸の」という材料の特性を表現するノ格の名詞をくみあわせることによって、完成品としてのセーターという衣服が毛糸の材質であるという情報が提供されている。また、「セーターの」というカザリと「着心地が」というカザラレとのくみあわせは、「着衣している衣服」をあらわし、「よくなった」という動詞とのくみあわせは、セーターの質的な意味を表現している。

このように、4例文で使用されている「セーター」の意味は一樣ではない。

「セーター」は、「毛糸であんだうわぎ、頭からかぶるようにして着る」¹⁵⁾という辞書的な意味を有しているのだが、上の4つの文では、「セーター」という辞書にある意味に、他の単語とくみあわせられた「連語」による表現、つまり、文法的なくみあわせによる意味が生じているといえよう。

上記は、連語のカザラレになる単語が意味的

にもっとも単純なモノ名詞である「セーター」であったのだが、それでも文中にあらわれる意味は、辞書にある意味を超え個別に異なっているのである。

わたしたち人間が言語をもちいて思考し伝達するとき、表現すべき対象が個別であるがゆえに、辞書的な意味の名づけがされている単語(一般的な単語)をいかに個別にあらわすかが問われることになる。単語のみではあらわしにくい現実描写は、「連語」をもちいて表現されることになる。「セーター」というモノ名詞でさえそうであるのだから、抽象名詞の文中での意味のあり方は、辞書にある意味に文法的なくみあわせ(連語)によって生じる意味をぬきにしてはとらえられないだろう。

文構成の視点からみても、モノ名詞には名づけられる実体そのものが存在するので、文の成分としての機能(主語や対象語そして述語の成文)をそのままはたすことができるのだが、抽象名詞のばあい、実体そのものではなく、「もののうごき」や「ものの性質や状態」などをさしめしているのであるから、モノ名詞のように、それだけで文の成分にはなりにくい。そのことは裏をかえせば、「連語」の形や他の文法的な形態をもってはじめて文の成文になることができるのが抽象名詞だといえるのである。

抽象名詞の典型である転成名詞にも同様のことがみられる。「たのしさ」や「たのしみ」などの形容詞から転成した抽象名詞、「み名詞」と「さ名詞」の文中での意味は、「連語」を手がかりとしてさぐれるのである。「み名詞」と「さ名詞」をカザラレにしている例を検証することにより、「カザリ」とのくみあわせにみられる文法的性質を調べ、転成名詞固有の機能とその文中での意味を明らかにしていくことが必要なのである。そのようななかから抽象名詞の精緻化がなされていくのだろう。

2. 「たのしさ」と「たのしみ」

2.1. 「たのしさ」をカザラレにしている 連語

転成名詞「たのしさ」を、名詞連語のカザラレにしている用例を13例あげてみる。

つぎの ~ の用例は、「この」「あの」「そうした」「その」という第2の代名詞のカザリをとまって「たのしさ」を個別化¹⁶⁾している。(なお、例文中の第一のカザリを細線、カザラレを二重線、第二のカザリを点線で示している。)

パリにいたときさまざまな議論をしたことなど考えると、久慈への懐しさは日に倍して来て、彼はもう永らく一言も饒舌らぬ日本語をぶつぶつと久慈に向ってひとり呟くほどだったが、まだ言葉の分らぬこの一人旅行の楽しさは、今は何物にも換え難かった。(旅)

あの夜の楽しさが、今、陽ざしに輝いて打ちよせる遠い波がしらをじっと見つめている彼の胸に蕭条たる思いをそそぎいれる。(人生)

「お互の心の中でそうした出発の楽しさをあてにしているのじゃなからうか」そして彼は心が清く洗われるのを感じた。(樟)

その、(作られた楽しさ)が、親和的な信頼感の楽しさを刺激して、みんなが明るく笑っていた。そういう空気を作った最初の人、小坪議長であった。彼は意識して、そういう空気を作ったのかも知れなかった。(人間)

つぎの も「とき」による限定をうけた「たのしさ」であり個別化されているといえよう。

新しい木の香のする風呂桶に身を浸した時の楽しさを思い出した。ほんとうに自分の子の家に帰ったような気のしたのも、そういう時であったことを思い出した。(嵐)

さて、つぎの用例を参照されたい。

それは人間が辛うじて到達し得た境界から私が一步を退転した、その意識によって引き起されるのだろう。多少でも愛することの楽しさを知った私は、憎むことの苦しさを痛感す

る。(惜)

遊び仲間から抜けてきたばかりで、まだ遊びの楽しさやほてりが顔に残っていた。そして、無心な微笑は、不思議にも石像の童子の微笑にも似て、少年は地藏の双子の兄弟のように思われた。(小)

それにしても、これまで幾度となく土地を変り、周囲に誰一人知るものもない境涯に自分をおいた経験は少なくないのである。しかも、今日ほど孤独の楽しさを味わったためしはかつてないのはどうしたわけであろう？(暖)平次はこの叔母さんが好きでした。向う意気が強くて、勤勉で、そして清潔な五十女。八五郎を自分の倅のように可愛がってる叔母さん。こんな人と、煎餅を囓りながら、茶を呑む半刻の楽しさを勘定に入れながら訪ねて来ると、(銭)

この ~ の用例は、一般的な「たのしさ」を表現しているといえるのだが、 ~ までの用例と同様、「たのしい」という「ひとの感情」を表現する形容詞の対象をそれぞれノ格のカザリにしているといえる。たとえば、 ~ は以下のように転成したと解釈できるのである。

「『愛すること』が楽しい」 「愛することの楽しさを」

「『遊び』が楽しい」 「遊びの楽しさや」

「『孤独』が楽しい」 「孤独の楽しさを」

「『茶を呑む半刻』が楽しい」 「茶を呑む半刻の楽しさを」

このように、「現実存在するもの」の「一側面」を表現する形容詞(例：山が高い。あの人は親切だ。)が現実を表現する名詞に転成するときには、「その現実」をノ格のカザリとした連語の形態をとり、名詞としての機能を果たしていくのである(例：山の高さ、あの人の親切)。

~ の連語は、 ~ の「こそあど」の形態をともなった例といい個別化されていて、名詞性が強い¹⁷⁾。 ~ の例は、カザリ自体が抽象名詞なので、一般化の度合いが強い。

また、その用例すべては「格（ハ・ガ・ヲ）」を伴っていて、文中での名詞性を十分にそなえたはたらきをしている転成名詞だといえる。

2.2. 「たのしみ」をカザラレにしている 連語

転成名詞「たのしみ」をカザラレにしている用例にはつぎのような文がある。（なお、――は述語部を示している。）

そんな釜を厚い鉄板から鍛へあげさせたのである。それを、自分の身が形作られて行くやうな気で、鉄工所へ見に行くのを義雄は毎日の楽しみにしてゐた。（岩）

翌朝、飛驒の若者も別れを告げて行った。家に帰って来た半蔵は最早青山の主人ではない。でも、彼は母屋の周囲を見て廻ることを久しぶりの楽しみにして、思い出の多い旧会所跡の桑畑から土蔵の前につづく裏庭の柿の下へ出た。（夜）

「お里の言う通りさ。好きな小袖でも造ってくれて御覧。それが何よりだよ。わたしたちの娘の時分には、お前、自分の筆筈が出来るのを何よりの楽しみにして、みんな他へ嫁いたくらいだからねえ」（夜）

そうしてそんな荒仕事がどうかすると寧ろ彼女に適しているようにすら思われた。養蚕の季節などにも彼女は家中の誰よりも善く働いてみせた。そうして養父や養母の気に入られるのが、何よりの楽しみであつた。界隈の若いものや、傭い男などから、彼女は時々椰楡われたり、猥らな真似をされたりする機会が多かった。（あ）

これら ～ の用例は、「毎日」「久しぶり」といった抽象名詞や「何より」という副詞（名詞＋連用形式の後置詞）が、ノ格のカザリになっている。しかし、カザラレの「たのしみ」は、「たのしさ」のように、格（ハ・ガ・ヲ）をともなって、文の成文（主語や対象語）になっているのではなく、「たのしみにする」「たのしみだ」という述語の一部分になっている。広い意味での合成述語の成分なのである。

本稿の「2.日本語教育での説明」で取り上げた辞典には、二重線を付したような近似的な用例が載せられていたのだが、「たのしみ」という名詞の項にもちいられた用例と「たのしむ」という動詞の項にもちいられた用例は、ともに上記の合成述語の一部分であるといえよう。

さらにつぎの用例をみられたい。

君は東京の遊学時代を記念する為に、大事にとって置いた書生の言葉を使えるのが、この友達に会う時の一つの楽しみだった。（生まれ出）

山本はせっせと二つめのケーキを平らげていた。週に一度、こうしてこの店で何種類ものケーキを食べるのが、山本の楽しみの二つだった。（女）

上の2例とも、「～のが～だった」という文の構成になっていて、「この友達に会う時の一つの楽しみだった」「山本の楽しみの一つだった」は、どちらも長い合成述語の一部分である。「たのしみだ」は、「たのしみ」にコピュラの「だ」をくっつけて述語にしたものである。「たのしみだ」「たのしみにする」「たのしみである」は、「たのしむ」という動詞と同様のはたらきをしているといつてよいだろう。

つぎの用例も「若返りの」というノ格の抽象名詞をカザリにしているのだが、「～のたのしみに～なる」というノ格までを含んだ合成述語の一部を構成した連語だといつていいだろう。

そしてこれが若し東京に於いてかの女との関係のつき初める時に於けるかの鎌倉行きのやうなものであつたら、若いものに対する好奇心やら可愛みやらでまた自分の胸も若返りの楽しみに一杯になつただろう。（岩）

このように、～の「たのしみ」の用例は、～までの「たのしさ」の用例とはまったく異なったカザリをもち、カザラレの「たのしみ」自体も名詞として主格（ハ格・ガ格）や対象格

(ヲ格)の形態ともなっていないことがわかる。それだけ「用言らしさ(動詞らしさ)⁸⁾」を残して、まだまだ名詞化しておらず、名詞とは呼べない形での使用状況であることが用例から明らかになるのである。それはまた、「たのしみ」の用例に「こそあど」の形態をともなった力ザリがあまりないことから判明する。

個別化されることが名詞の特徴であるとするならば、個別化されにくいということが用言の特徴である。「たのしみ」は個別化されにくく、「似非名詞」であることを匂わせている。いかにもノ格の連体的な力ザリをともなっているのだが、「毎日の」や「久しぶりの」のノ格は構文上の形であって、意味上は現実存在(モノ)の側面(ウゴキ・性質・状態)の側面(ようす)を表現しているといえるのである。

つぎの例文は、確かに「たのしみとは」「たのしみは」の形で格を伴ってはいるが、上記の例文を逆さにした構文である。

1 例目は や の構文である「～がたのしみだ」という文、すなわち「眼に入る人間のすべて、小指一本で殺せると思い当り、そして実感できた時(が)王侯貴族の、無上のたのしみだ(と)いうのではないか。」の主述関係を逆さにした文であるといえよう。2 例目も「丸善は(にあるのは) 実際僕等が京に出て来る唯一楽しみだ。」を逆さにしたぶんであろう。

ながめるうち、赤の他人の誰彼が、みな身内の如く思えてきて、あるいは王侯貴族の、無上の楽しみとは、眼に入る人間のすべて、小指一本で殺せると思い当り、そして実感できた時というのではないか。(て)

「とにかく、今度の日曜にでも丸善にいっしょに行きましょう。そうして何かこう云う風な書物を見つけてあげましょう。尤も、僕はもう二三摩覗いて来たんですがね。何度行っても飽きないのは彼処ですよ。実際僕等が京に出て来る唯一楽しみは丸善にあるのです。」(真)

さらにつぎの文は、トートロジーの用例である。

ところで話は変わるが、可笑しなことに銀座の女が浅草へくると一方、浅草の地下鉄横町の喫茶店の女たちは、公休という、銀座へ出かけて行き、これは必ずしも逢曳ではなく、映画見物の楽しみを楽しみに行くのだが、映画なら手近かの六区で見たらよさそうなものを、わざわざ丸の内に赴くのである。ある時私は、可笑しいということ、その女たちの一人に言ったら、(如)

このように「たのしみ」の用例の多くは、文中で概して名詞としてののはたらきをしていない。対象語や主語の一部になっているとしても、つぎの例のように「というのを」「というものが」などをとめない、直接に格形態にはなりにくいようである。

なまぬるい海風の吹きあげてくる夜道を二十分ばかり歩いて、途中で少々 of 買物をして、下宿に帰りついたのが七時半。買ってきた乾魚を焼き、とろろこんぶに湯をかけて即席の吸物をこしらえ、事務的に、黙って食事をする。食事の楽しみというのをまるで忘れてしまったような日々であった。(人間)

もう少し歳が老けると、足が弱ったり不精になったりして長旅が厭になるし、旅行の楽しみというものが減ってくるからね。内地なら旅行費なんか幾らもかかりやしない。千円もあれば半年ぐらゐ方々で気たのに遊んでられらあ」(生まれ)

つぎの用例は、「カラ格」の抽象名詞であるが、「浅草の散歩を楽しむ」という動詞からの転成で、「カラ格」は、「楽しんだときから」という時間の機能を意味しており、動詞のはたらきが強いようである。

先日浅草の散歩の楽しみから、過ぎし昔の思出を、字面の美しい文字で細かに書いてある。(生まれ)

3. 転成名詞

3.1. 動詞派生の転成名詞

鈴木康之は、動詞からの転成名詞「うごき」や抽象名詞「かたち」「すがた」をカザラレとしたのノ格の連語に言及している¹⁹⁾。そのなかでは「モノ化の手つづき」²⁰⁾をとった抽象名詞の文のなかでの機能と、「モノ化の手つづき」をとらず、カザリをとまなっていない「うごき」という抽象名詞を下記のように端的に明らかにした。

夜の町は ひとのうごきが 絶えた。
 夜の町は うごきが絶えた。
 夜の町は ひとのうごきを 失った。
 夜の町は うごきを失った²¹⁾。

この例でわかるように、「ひとのうごきが」「ひとのうごきを」はそれぞれ主語や対象語として文中で機能している。それに比べて、「うごきが絶える」や「うごきを失う」などのひろい意味での慣用句的なくみあわせは、「夜の町は」をのべたてる合成述語のやくわりをはたしているといえる。転成名詞「うごき」や抽象名詞「かたち」「すがた」などがカザリを伴うばあい、合成述語になる慣用的なくみあわせ以外には例をさがすのが困難だと記されている²²⁾。

3.2. 形容詞派生の転成名詞

「たのしさ」と「たのしみ」の用例を一例にして論ずれば、「たのしさ」をカザラレとする用例の多くは、「モノとしての名づけの機能を保証する」モノ化の手つづきがとられているものがおおかったといえる。その中心は「たのしい」という「感情の対象」をカザリにしている、筆者がノ格の分類中、「抽象名詞の關係的なむすびつき」²³⁾の分類にしているタイプであった。

一方、「たのしみ」をカザラレとする用例の多くは、前に記したとおり「～をたのしみにする」「～がたのしみだ」のように使われていること

がおおく、「～をたのしむ」や「～がたのしい」という単語の動詞や形容詞のはたらきをそのままになっているようである。「～をたのしみにする」「～がたのしみだ」の「たのしみ」という抽象名詞は、広い意味での用言的な単語の単なる構成要素にすぎないものであって、「する」という形式動詞をとまなったり、名詞述語文のなかにあってはじめて、ひとつの名づける意味をもつ例がおおいといえるのである。抽象(転成)名詞とはいえ、いまだ体言としての実質をとまなわず、用言としての機能をはたしている存在であるといえるだろう。

このように、転成名詞の文中での意味は、辞書的な意味だけではなく構文中で転成名詞がどのような他の単語とむすびついているのか、どのような連語としてはたっているのかということを見るとき新たな意味が理解されてくる。「名づけ」をさししめず辞書的な意味にくわえ、「転成名詞の意味」理解に必要なものは「連語」という単語のむすびつきに見られる意味なのである。あたかも名詞として機能しているかに見えても実は「似非名詞」であり、そのはたらきも意味も名詞とはいいいがたいものも多いといえよう。

言語表現にあっては、「つくえ」や「いす」とかというような実質的なものをさししめしているモノ名詞にあっては、格変化のシステム(ハ格・ガ格・ヲ格...)をもたせるというような形態論的な手つづきや、主語や対象語としてつかいこむというような文論的な手つづきなどが、ものをさししめすという文中での意味ときちんに対応していて、その名詞としてのあり方を十分に保証しているといえるのだが、「たのしさ」や「たのしむ」というような転成名詞では、「つくえ」や「いす」などのようなモノ名詞とおなじレベルで保証されているとはいえない。

先にみてきたように、転成名詞「たのしさ」は、その抽象性において、文のなかで文の成分として、主語や対象語になるには、「主体:もちぬし(ひと名詞)」や「対象(作用名詞)²⁴⁾

を指定する力ザリがあることが多い。一方、「たのしみ」では「主体：もちぬし」(ひと名詞)や「対象(作用名詞)」の力ザリをもつことはほとんどない。

おわりに

このように、同じ形容詞から転成した抽象名詞である「たのしさ」と「たのしむ」にあっても、その文法的な性質のレベルに差異がみられることがわかる。「たのしみ」の文中での使われ方は、その転成元(動詞だと思われる。)とあまり差がないことが判明したのである。「み名詞」は、体言の形態をとってはいるのだが、用言そのものの意味をもっているといえるのである。いわゆる日本語教授者が従来行ってきた「み名詞」の説明である「その性質・状態そのもの」とはよくできた解説であるといえよう。

それに比べて、「さ名詞」は、その名詞性は文法的に高いにもかかわらず、見出しに出されていない点は肯けないところがある。その意味説明が「質・量の程度に重点をおいた名詞」というのも妥当であろう。ただ、その文中での使われ方の説明などの点で、これまでの説明が不十分であったと思われるのである。なかんずく文中にあらわれる転成名詞を力ザラレとした連語の観察が不十分であった。

文中での単語、とりわけ転成名詞や抽象名詞の文中での意味理解にはその単語の文法的な性質、やくわり研究、連語研究が必要不可欠である。

注

- 1)『国語学大辞典』「転成」の項は、高橋太郎によって下記の記述がなされている。(名詞への転成の部分のみ記す。

【転成】他品詞からの転成として、動詞は、第一中止形(連用形)が名詞になるが、(かざり・見え)、複合語の方が生産的である。(カンづめ・くみあわせ)。形容詞の場合、語幹に「さ」をつける(たかさ・きれいさ)。「み」や「け」をつけるものもある

が、あまり生産的でない(うまみ・さむけ・いやみ・いやけ)。

高橋は、語幹に「け」をつけたものも名詞としてあげている。本稿では、「たのしげ」というかたちについてはナ形容詞として考えることにする。「たのしげ」に格変化をもたせた例は今のところあまりないと思われるからである。

- 2) 高橋太郎『動詞九章』ひつじ書房、2003。などがある。
- 3) 監修 名柄迪・西原鈴子・川村よし子・杉浦由紀子著『外国人のための日本語例文・問題シリーズ 形容詞』荒竹出版、1995。pp. 157-158。
- 4)『例解新国語辞典』第五版・三省堂、1999。p. 378。
- 5)『例解新国語辞典』第五版・三省堂、1999。p. 968。
- 6)『国語学辞典』10版、1999。東京堂出版。pp. 664-665。
- 7)文化庁『外国人のための基本語用例辞典』(第三版)大蔵印刷局、1990。pp. 584-585。
- 8)「たのしい」の対義語が「くるしい」とであるという説には疑義が生じるが、ここでは、『外国人のための基本語用例辞典』のp.584. のままにあげておく。
- 9)文化庁『外国人のための基本語用例辞典』(第三版)大蔵印刷局、1990。pp. 309-310。
- 10)文化庁『外国人のための基本語用例辞典』(第三版)大蔵印刷局、1990。p. 211。
- 11)文化庁『外国人のための基本語用例辞典』(第三版)大蔵印刷局、1990。p. 408。
- 12)『日本語文法・連語論(資料編)』むぎ書房、1983。では、動詞連語、名詞連語は、「動詞」、「名詞」を核とした連語として分析をしているのだが、ここではすこし幅をひろげた解釈を試みている。
- 13)「力ザリと力ザラレ」という名称は、『日本語文法・連語論(資料編)』の規定による。
- 14)「ノ格の力ザリ」については、中野はるみ『名詞連語「ノ格の名詞+名詞」の研究』海山文化研究所、2004。に詳しく記している。
- 15)『例解新国語辞典』第五版・三省堂出版、1999。p. 551。
- 16)力ザリの「個別化」によって、連語(単語のむすびつき)の意味が変化する。例えば、A「女のセーター」とB「この女のセーター」では、セーターの意味が異なってくるのである。Aは、一般的な使用者が女性である「女もののセーター」で

あり、Bは、所有者と所有物の意味となり、セーターが「個別化」される。このように、「一般」が「個別」かが問われる。この点にかんしては、中野はるみ『名詞連語「ノ格の名詞＋名詞」の研究』海山文化研究所。2004。参照。

- 17) 名詞には、「他とのちがいに注目する名詞」と「特性に注目する名詞」とがあり、「こそあど」の形態をもつ代名詞は「他とのちがいに注目する名詞」の典型であるといえよう。中野はるみ『名詞連語「ノ格の名詞＋名詞」の研究』海山文化研究所。2004。参照。
- 18) 『外国人のための基本語用例辞典』では、「たのしみ」が「たのし・い」という形容詞のなかの小見出しとしてあげられているのだが、「たのし・む」(動詞)の小見出しとしたほうが相応しいのではないだろうか。
- 19) 鈴木康之『現代日本語の名詞的な連語の研究』日本語文法研究会編。1994。pp. 76－94。
- 20) 「モノ化の手づき」とは、「うごき」などの現象を表現している抽象名詞が、その現象の主体(もちぬし)をカザリとすることなどによって、「ものとしての名づけの機能を完備させている」ことを言う。
- 21) 鈴木康之『現代日本語の名詞的な連語の研究』日本語文法研究会編。1994。p. 79。
- 22) 鈴木康之『現代日本語の名詞的な連語の研究』日本語文法研究会編。1994。p. 81。
- 23) 中野はるみ『名詞連語「ノ格の名詞＋名詞」の研究』海山文化研究所。2004では、名詞連語におけるノ格のカザラレが抽象名詞のばあいの連語のむすびつきを、「関係的なむすびつき」「状況的なむすびつき」「質規定的なむすびつき」の3つに分類している。

24) ここでは、「愛すること」「遊び」などの動作動詞からの転成名詞を示している。

参考文献(注の表記以外)

- ・鈴木重幸『日本語文法・形態論』むぎ書房。1972。
- ・鈴木康之「抽象名詞の語彙的な意味のあり方について」『東洋研究』66号。1985。

用例文献

- ・(あ) 徳田秋声『あらくれ』新潮文庫
- ・(嵐) 島崎藤村『嵐・ある女の生涯』新潮文庫
- ・(如) 高見順『如何なる星の下に』新潮文庫
- ・(石) 石坂洋次郎『石中先生行状記』新潮文庫
- ・(岩) 岩野泡明『岩野泡明五部作』新潮文庫
- ・(生まれ) 有島武郎『生まれ出ずる悩み』新潮文庫
- ・(生まざ) 正宗白鳥『生まざりしならば』新潮文庫
- ・(惜) 有島武郎『惜しみなく愛は奪う』新潮文庫
- ・(女) 赤川次郎『女社長に乾杯』新潮文庫
- ・(小) 小泉八雲『小泉八雲集』新潮文庫
- ・(人生) 尾崎士郎『人生劇場7』新潮文庫
- ・(銭) 野村胡堂『銭形平次』新潮文庫
- ・(太) 曾野綾子『太郎物語』新潮文庫
- ・(暖) 岸田國士『暖流』新潮文庫
- ・(て) 野坂昭如『てろてろ』新潮文庫
- ・(人間) 石川達三『人間の壁』新潮文庫
- ・(パ) 開高健『パニック』新潮文庫
- ・(真) 野上弥生子『真智子』新潮文庫
- ・(夜) 島崎藤村『夜明け前』新潮文庫
- ・(檸檬) 梶井基次郎『檸檬』新潮文庫
- ・(旅) 横光利一『旅愁』新潮文庫